

# 谷口智則さんのおすすめ図書



<p>1 ★ドアがあいて… エルンスト・ヤンドゥル/作, ノルマン・ユンゲ/絵, 斉藤洋/訳 (ほるぷ出版, 1999)</p> <p>壊れたおもちゃがドアの向こうに一人ずつ入っていく展開にドキドキ。ドアの向こうに入っていくときの音と出てきた時の音の違いで治ったことを表していて想像力が膨らむとてもいい絵本だと思います。</p>	<p>14 ★風の歌を聴け 村上春樹/著 (講談社, 2004)</p> <p>僕はどの作家さんでもデビュー作や初期の作品が好きです。村上春樹さんの作品の中でも、主人公の僕と鼠が登場する初期の3部作がとても好きで自分の美大時代を思い出します。暑い夏にビールが飲みたくなる1冊。</p>
<p>2 ★かいじゅうたちのいるところ モーリス・センダック/作, 神宮輝夫/訳 (富山房, 1986)</p> <p>僕が1番好きな絵本。かいじゅうたちのいる所へ向かって航海する場面など最初は文章が少し長いかなと思うのですが、読んでいるうちに言葉のリズム感にすっかりはまってしまいます。かいじゅうおどりをするシーンは言葉がないのですが、かいじゅうたちの声が聞こえてくるようです。余韻の残る温かいイラストも好きです。</p>	<p>15 ★国境の南、太陽の西 村上春樹/著 (講談社, 1995)</p> <p>初期の3部作以外の中編小説ではこれが一番好きです。他の作品にもいろいろと印象的な女の子が出てくるのですが、このお話に出てくる足の悪い女の子がとても印象的です。</p>
<p>3 ★スイミー ちいさなかしこいさかなのはなし レオ・レオニ/作, 谷川俊太郎/訳 (好学社, 1986)</p> <p>レオレオニ作品はどれも好きですが、特に好きなのはやっぱりこれ。小学生の時に教科書でも習ったのですが、大人になって読んでみるとまた違ったテーマを感じてとても感動します。「僕が目になろう」と言ったスイミーは何を見ようとしていたのでしょうか？谷川俊太郎さんの文章と美しい絵がとてもマッチしています。</p>	<p>16 ★ねじまき鳥クロニクル (第一部) 泥棒かささぎ編 村上春樹 /著 (新潮社, 1994)</p> <p>長編小説の中では「世界の終わりとハードボイルドワンダーランド」と並んでこのお話が好きです。どちらを入れるか悩みましたが、より現実に近いこちらの方が物語に入り込めるかなと思いました。いなくなった妻とネコ、そしてねじを巻く鳥。大人になって忘れてしまった物を思い出させてくれる物語です。</p>
<p>4 ★おおきな木 シェル・シルヴァスタイン/作, 村上春樹/訳 (あすなろ書房, 2010)</p> <p>一本のリンゴの木と少年のお話。木が少年に対して与え続ける無償の愛に心が打たれます。繰り返しのリズムが心地いいお話と線画だけで描かれた絵がとてもよくて、最後のラストシーンにもジーンとします。</p>	<p>17 ★神の子どもたちはみな踊る 村上春樹/著 (新潮社, 2002)</p> <p>短編集の中では、これが一番好きです。阪神大震災の前後のことを書いた短編集ですが、それぞれ直接地震の事を書いている訳ではなく、地震をきっかけにしたそれぞれの日常の生活が書かれています。中でも特に好きなのが『蜂蜜パイ』というお話。もし絵本になったら絵を描いてみたいな。</p>
<p>5 ★まっくらネリノ ヘルガ・ガルラー/作, 矢川澄子/訳 (偕成社, 1973)</p> <p>いろとりどりの兄弟たちのことをいつもうらやましがっていたまっくらネリノ。自分のいろについて考えさせられる深い絵本です。黒や灰色の画用紙にクレパスで描かれた画風も僕の絵本と通じる所があり、とても好きです。</p>	<p>18 ★汚れつちまつた悲しみに… 中原中也詩集 中原中也/著 (集英社, 1991)</p> <p>絵本作家を夢見ていた美大生時代によく読んだ詩集。美しい言葉のリズムや繰り返しのリズムなど、僕の絵本も影響を受けていると思います。詩人ではランボーも好きです。</p>

<p>6 ★どこいったん</p> <p>ジョン・クラッセン/作, 長谷川義史/訳 (クレヨンハウス, 2011)</p> <p>僕と同年代の若手の絵本作家さん。自分のなくなった帽子を探していく繰り返しのストーリーと、長谷川義史さんによる大阪弁の和訳がとても面白いです。絵の色調も独特で、最後はドキッと考えさせられます。</p>	<p>19 ★工場</p> <p>小山田浩子/著 (新潮社, 2013)</p> <p>最近の中では一番好きで注目している作家さんです。芥川賞を取られた「穴」も好きですが、こちらの作品はより現代社会に対する皮肉が込められていて面白いです。最後ですべてが判明する展開もとても好きです。</p>
<p>7 ★アンジュール ある犬の物語</p> <p>ガブリエル・バンサン/作 (BL出版, 1986)</p> <p>言葉のない絵本。絵の描写力があれば言葉なんていらんということに僕に教えてくれた絵本です。僕のデビュー作「サルくんとお月さま」が言葉のない絵本だったのも、この絵本があったからかもしれません。</p>	<p>20 ★砂の女</p> <p>安部公房/著 (新潮社, 2003)</p> <p>安部公房さんの作品の世界観がとても好きで、美大生時代によく読んでいました。頭の中に情景が鮮明に残る小説は少ないのですが、この小説は今でも頭に情景が残っています。</p>
<p>8 ★ぼくおかあさんのこと…</p> <p>酒井駒子/文・絵 (文溪堂, 2000)</p> <p>子どもが描いたような絵とか子供っぽい絵とかが多い日本の絵本界で酒井駒子さんの絵は描写力が圧倒的です。絵がすごく語るのでもあまり文章が長い絵本よりは、この絵本ぐらい文章が短い絵本の方が余韻があって僕は好きです。最後の靴下にも注目。</p>	<p>21 ★檸檬</p> <p>梶井基次郎/著 (角川書店, 2013)</p> <p>この小説も頭の中に情景が浮かんでくる作品です。本屋さんの画集の山の上に置かれた黄色い檸檬。とても絵画的な小説だと思います。優しい文体もとても好きです。</p>
<p>9 ★ちいさいおうち</p> <p>ヴァージニア・リー・バートン/文・絵, いしいももこ/訳 (岩波書店, 2001)</p> <p>ちいさいおうちを主人公に移ろっていく世の中の様子を描いた絵本。ちいさいおうちを中心に同じ構図で進んでいく物語がとてもいいです。途中からおうちに感情があるかのように見えてくる絵がとても魅力的です。</p>	<p>22 ★ボッコちゃん</p> <p>星新一/著 (新潮社, 2012)</p> <p>僕は絵本にもオチは必要だと思っていて、星新一さんからは短い中でドキッとさせられるオチの方法を教えてもらったような気がします。</p>
<p>10 ★ぼくのともだちおつきさま</p> <p>アンドレ・ダーハン/作, きたやまようこ/文 (講談社, 1999)</p> <p>僕がこの絵本を最初に見た時は、絵だけで言葉がない絵本でした。今出版されているものには言葉が入っていますが、言葉がなくても絵だけで僕とお月さまの感情が十分伝わってきます。</p>	<p>23 ★限りなく透明に近いブルー</p> <p>村上龍/著 (講談社, 2009)</p> <p>村上龍さんの小説も美大生時代にたくさん読みましたが、やっぱり一番好きなのはこれ。前半の過激な描写と対比するような、後半のタイトルと同じ文章が出てくるあたりから黒い鳥が飛んでくる所の文章は何度も何度も読み返したくなるほど美しいです。</p>
<p>11 ★チョコレートをたべたさかな</p> <p>みやざきひろかず/作・絵 (BL出版, 1989)</p> <p>橋の上からチョコレートを落とした少年とそれを食べた魚のお話。いろいろと考えさせられるストーリーとセピア色で描かれた水彩画がとても素敵です。</p>	<p>24 ★新編銀河鉄道の夜</p> <p>宮沢賢治/著 (新潮社, 2012)</p> <p>表題作の『銀河鉄道の夜』もとても好きなのですが、僕が一番好きなのは中に収められている「よだかの星」。宮沢賢治さんの童話の世界は大人になってから読んで心にしみます。そんな絵本を自分も作りたいと思っています。</p>
<p>12 ★あな</p> <p>谷川俊太郎/作, 和田誠/画 (福音館書店, 1983)</p> <p>主人公がただ「あな」を掘って、その「あな」を埋めるだけの単純なお話ですが、単純な中にもいろいろと考えさせられます。縦に開く構図も面白いですし、表紙の絵も中を読むうちにそういうことかと分かってきます。</p>	<p>25 ★アドルフに告ぐ (1)</p> <p>手塚治虫/著 (講談社, 2010)</p> <p>僕は基本的にはあまり漫画は読まないのですが、手塚治虫さんの漫画は学生時代によく読みました。なかでも何度も読み返したくなるのはこの作品。どきどきする展開にいつの間にか物語の中に引き込まれてしまいます。</p>

13 ★星の王子さま	26 ★ピノッキオの冒険
サン＝テグジュペリ/作（岩波書店，2000）	カルロ・コッローディ /著（光文社，2016）
<p>心に残る物語。王子様とバラの会話はもちろん、登場する数学者、点灯夫、キツネたちと王子様との会話もそれぞれとても深くていろいろと考えさせられます。本当に大切なものは目では見えない。大人になって忘れてしまったものを取り戻せるかもしれない物語です。</p>	<p>映画でしかピノキオのお話は知らない方も多かもしれませんが、原作は世の中に対する皮肉や寓話がたくさん入っていてとても深い物語です。嘘をつくと伸びる鼻、遊びほうけると生えてくるロバの耳など、人形のピノキオが本当の人間になろうと努力するお話です。</p>

☆下記の4冊は絶版などの理由で提供ができません。県立図書館が所蔵していますので、ご覧になりたい方は、リクエストをお願いいたします。

★まどのむこう	★幽霊たち
チャールズ・キーピング/著，猪熊葉子/訳（らくだ出版，1983）	ポール・オースター/著（新潮社，2013）
<p>チャールズキーピングの絵本に出会って僕は絵本作家になろうと思いました。美しい絵と深い物語。大人になって読んでみても感動します。まどから主人公の少年が見た情景が描かれていて、最後のラストシーンもとても好きです。「ジュゼフのにわ」も好きです。</p>	<p>ポールオースター作品の中でも初期のニューヨーク3部作と言われるものが特に好きです。登場人物がすべて色になっているのも面白く、それぞれの登場人物の名前からいろいろな事を考えさせられます。私立探偵のブルーとブラックの関係は村上作品の僕と鼠の関係にも似ているのかなと。</p>
★日々の泡	★ガラスの街
ボリス・ヴィアン /著（新潮社，1998）	ポール・オースター/著（新潮社，2013）
<p>これも美大生の時によく読んだ淡く儂い恋愛小説。小説にはもちろん色なんてないけれど、この作品を読むと、トレーシングペーパーをかけたような淡い色の世界が想像されます。</p>	<p>私立探偵に間違えられた主人公がニューヨークの街を舞台に謎を解き明かそうとする物語。想像を超える展開でお話の中に引き込まれます。「幽霊たち」と一緒に読むとさらにいいかもしれません。</p>